

## 伝統と現代、独立と依頼 —中国都市家族の子育てからみた世代間関係の矛盾—

○鄭楊（中国哈爾濱師範大学）

### 1. 問題の所在と目的

今の中国では、最も主要な育児パターンは、「隔代養育」である。2011年、2013年、2015年の「中国健康と養老追跡調査」のデータによれば、孫の世話をしている中高年の割合は、2011年の49%から2015年の53%に上昇している（呉培材，2018）。ところが、こうして大いに利用されている「隔代養育」に対する評価は、中国の学界においても世論においてもその評価は賛否両論である。

これまでの先行研究では、中国都市家族によく利用されている「隔代養育」には、「重幼軽老（子どもを中心に老人を軽視する）」という特徴があると言われ、「長幼有序」を重視する伝統的な世代間関係とはあまりにも対照的であるため、研究の焦点となり、批判される的にもなっている。また不思議なことに、伝統的な世代間関係の衰退も、新しい世代間関係の台頭もその両方を問題視されているのである。さらに、親世代は伝統的な家庭文化を継承した献身的な貢献者であり、子世代は近代家族に憧れているにもかかわらず儒教文化の受益者である、というステレオタイプの言説が、中国社会に流布されている。では、実際の中国都市部家族の世代間関係においては、先行研究で描かれたように、親世代と子世代は異なる方向で理想的な家庭を追求しているのだろうか。

上記の問題に対して、実はこれまでのマクロな視点からの研究は、明確な答えを与えていない。ミクロの視点からの研究では、やや公式的に、親世代は伝統的な世代間関係の見守る者、犠牲者とみなされ、子世代は伝統的な世代関係の破壊者、近代家族関係を試みる者と見なされている。ところが、どちらも世代間関係に関連しているにもかかわらず、それぞれの論述の間には往々にして溝がある。そこで、本研究では「子育ては誰の責任なのか」を切り口として、都市家族の世代間関係を大きな時代背景に置いて検討し、同時にインタビュー調査を通して、中国都市家族の世代間関係が、伝統的なものなのか、あるいはより現代的なものになっているのかを問う。

### 2. 研究方法

研究方法として、半構造的インタビュー調査とグラウンデッド・セオリー・アプローチ（Grounded Theory）を用いて、データから重要な情報をより正確に析出して分析を行う。そこで、本研究では、子育て経験のある11名の母親を研究対象に半構造化インタビューを行った。収集したデータに基づいて、まずオープン・コーディングを通して事例を分類し、12個の軸足コーディングを抽出してからカテゴリーを比較し、さらに3つの選択的コーディングをたどり、負事例の探索という手続きも行い、中心的なカテゴリー「伝統家庭の義務と近代家庭の権利」で、その理論的飽和を目指す。

### 3. 考察と結論

まず、親世代が伝統的な世代間関係の守護者、犠牲者であり、子世代がその破壊者、利益者であるという先行研究の指摘は確認できなかった。子世代は大いに経済的、育児の日常的なケアを親に依存しているが、親に恩返しをしたい、親と対等でいたい、自立した核家族を築こうと努力していることが明らかになった。

次に、子育てなどの意思決定権においては、一方通行的に子世代、または親世代に偏っているのではなく、世代間のもつ資源の格差に応じて親世代主導か、子世代主導か、あるいは平等で協力的な権力構造が形成されるかが決まる様子が分かる。

さらに、市場経済の時期に入ってから、国家は経済発展を中心とした社会政策を推進し、家庭の発展を主な目標としなく、儒教の孝養文化の宣伝を通じて扶養機能を家庭の責任として強化している。市場は科学育児などを包括している近代家族の理念を掲げて、育児基準を絶えず引き上げ、「よその子ども」に追いつき追い越せと教育関連商品を親に購入させている。

キーワード：子育て期、世代間関係、近代家族